

雪裏の梅華、一枝開けり

『永平広録』巻八「小参」

新しい年を迎えました。今年の冬は、昨年の猛暑に引き続いて暖冬かと思われましたが、十二月初めに積雪があるなど、厳い冬になりました。梅の花もこの寒さの中で震えているのではないでしょうか。

さて、「冬来りなば、春遠からじ」と言われるように、季節は確実に巡って参ります。この冬の寒さと厳しさもある意味、春を迎えるための準備なのです。人は勝手な者で、暑い時には、早く涼しくなればよいのに、寒い時には、早く暖かくなればよいのにと考え勝ちです。でもそれは、季節の移ろいのほんの一面、その一部だけを取り上げて愚痴をいっているだけで、季節全体、ましてや一年の時の流れを無視しているのです。この世に不要な季節などあるはずがありません。それは、寒い冬についてもいえることです。

ここに挙げた一句は、道元の新年の上堂（説法）の時の言葉です。年が窮まった時、つまり年末を過ぎ、新年を迎えたときの心境を述べているのです。道元の眼前には、雪の積もった庭の梅の木があり、その枝には蕾を膨らませ、僅かに綻んだ梅の花があったのでしょう。

それが、道元の見た新年の風景であり、その当たり前の世界が綿々と受け継がれ、毎年毎年同じ様に枝に花を付けるのです。寒さに震える梅の花も新年の姿であり、それが当たり前のように繰り返されることこそ、真実のありようであるというのです。

春の来ない冬はありません。溶けない雪はありません。厳しい世情ではありませんが、皆さんと供に力を合わせ、素晴らしい一花を咲かせるような年にしたいものです。



曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部

解説

道元禪師は、多くの人々に仏法を伝えるため『正法眼蔵（しょうぼうげんそう）』九十五巻を著されたことは、広く知られるところです。しかし、禪師はそれだけでなく、実際の説法の記録として、ここに挙げた『永平広録』も残されています。

この『永平広録』は、十巻より成り、京都・興聖寺での説法から福井・永平寺に入られた後の説法まで、数多くの上堂（お弟子さんへの言葉）を記録しています。

表題の句は、実際に新年を迎えるに当たつての上堂における言葉です。そこには、実際にお弟子さんたちを目の前にし、永平寺の風景が眼前に広がる中で、仏法のありよう、真実の姿が新年の景色として如実に表されているのです。